

子どもの育ち、子育てと新しいメディア

白梅学園大学学長 汐見 稔幸

新しい情報処理、伝達・交流のメディア＝ツール（機器）の発達にはめざましいものがある。都会の電車に乗ってみればわかるが、話したり座って寝たりしている人以外のかたりの人がスマートフォン（スマホ）を出して、メールを読んだりゲームをしたり動画をみたりするようになってきている。あるとき電車の中で数えてみたら、乗客の半数近くがスマホを手にあれこれ操作していたので驚いた。

調査の結果もそのことを示している。今は携帯電話よりもスマホをもっている母親のほうが多くなり、しかもその傾向は若い世代ほど大きいということも判明した。家庭でスマホを所有している母親は、20代以下では80%を超えていて、40代以上の47%を大きく上回っていた。逆に携帯電話は20代以下が26%なのに40代以上は56%が所有している。若い母親世代は、携帯電話は4人に1人しかもたず、スマホは4人のうち3人以上もっている時代になっている。つまり年齢が低いほどスマホに親和的になっていて、この20代の世代が今後30代、40代…となっていくと、やがて全世代が80%以上スマホを所有しているという時代がやってくるのが十分に予想される結果であった。もっとも20、30年後のメディア進化の具体的姿は予想できず、スマホ等とはまったく違ったメディアが広がっているかもしれないが。

ともかく、この数字をみる限り、メディアの多様化が進んでいる時代の中で、「2013年はスマホが一挙に広がりだした時代」として定義してもよいと思われる内容である。パソコン（PC）の利用率のデータでも、40代以上の母親の利用率が78%なのに、20代以下

では61%弱と、PCへの依存度も若い世代は逆に減ってきている。「PCからスマホへ」という流れが本格的に始まっているかのようである。

スマホがそこまで好まれるようになった理由は何であろうか。タブレット端末もほとんど同じ機能をもっているのであわせて考えてみたいが、端的に言うと、電話機能、カメラやデジタルビデオ機能、メール機能がかなり高度に備わっているだけでなく、ゲーム機の機能やPC機能も有しているからだろうと思う。地図がわからないときにもスマホで地図画面を出して探索できるし、電車の時刻表にも活用できる。キーワードを入力すればおいしい店を探すこともできるし、写真や動画を送ってリアルタイムに近い状態で情報交換もできる。画面で本を読むこともできるし、新聞がなくてもニュースを読める。音声で質問すれば、文字やデザイン、写真で答えが出てくるようなスマホも発売されていて、「何でも手に入る情報タンク」を常備して歩いているようなものである。アプリが無数といってよいほど用意されていて、多様な情報の獲得だけでなく、交流、情報伝達、音楽データ倉庫、遊具、教育ツール等々として使える。コンパクトだが可能性のきわめて大きい情報メディアとなっているのである。これが流れをスマホへと押しあげている理由であろう。すでに任天堂などは、大型のゲーム機中心の企業戦略の転換を強いられてつつある。おそらく今後しばらくは、スマホは、電話、メールだけでなく、多様なコミュニケーションと情報獲得、遊具、学習などのツールとして人気を拡大していくと思われる。

保護者、とくに母親がこれほどにスマホを使用しているのであるから、子どもの前にはテレビ、ビデオだけでなくスマホ環境とでもいべきものが登場しつつあるといっても過言ではない。PCが登場して家庭にPC環境という日常的な情報環境ができたのはもう10年以上前であるが、これは扱い方が幼児には簡単でなく、つまりインターフェースがさほどよいわけではなかったため、幼児にとって風景の一部となるほど日常的な環境には必ずしもならなかった。しかし、スマホはやや事情が異なるようである。手軽で、幼児でももつことができ、動かし方も簡単、操作も指一本で済み、壊れにくい。企業もそこを活用して幼児用のアプリを開発している。そのため、母親が日常的にスマホやタブレット端末を使って生活していると、幼児自身も真似て、スマホやタブレット端末を日常的に使う場合があるということがわかった、というのが今回の新しい知見である。

新しいメディアが登場すると、その子どもへの影響がネガティブに語られるというのが世の常である。そのことを若い母親世代がどう意識してこうしたスマホやタブレット端末という新たなメディアとわが子を出会わせているかということも今回の興味ある調査項目であった。

詳しくは以下の各章の報告と分析を読んでいただきたいが、概略以下のことがみえてきた。テレビ、ビデオの影響については視聴がいわば日常化している感じが浮かびあがったが、乳幼児の視聴が長時間にならないように配慮している様子もまた感じられる結果であった。あわせて外遊びやおもちゃ遊び、絵本の読み聞かせなどとのバランスを考えた生活を大事にしている親が多い様子も明らかになった。これは子育て世代の生活スタイルの変化の反映という面と、乳幼児のテレビやビデオ長時間視聴への小児科医会等からの批判や提言など、社会的な雰囲気の影響もあって考えられる。

スマホやタブレット端末については、テレ

ビやゲーム機等と同じように目の健康への影響の心配やゲーム等への依存性への懸念が子育て世代全体にあることがある程度わかった。しかし、実際に日常的にスマホやタブレット端末を使っている母親の家庭に限定すれば、乳幼児にスマホ等を使わせることへの基準がないこともあって、すでに1歳、2歳から日常的にスマホで遊んだり学んだりしている乳幼児が2割程度いるということがわかった。これは人によっては予想以上のデータであったと思われるかもしれないが、若いスマホ母親世代には当然と映る可能性がある。今後、先に述べたようにこうした状況への懸念が表明される可能性があるが、正確なことをいうには、たとえば生活行為のバランスのよい子と偏りの強い子、親子のコミュニケーションが活発でスマホを日常的に利用している子と、親子のコミュニケーションが不十分でいてスマホを積極的に利用している子との差等がきちんと調べられるべきだろう。そのうえでの責任のある発言が期待される。

こうした時代には、スマホ・タブレット端末時代の新たなメディアリテラシー教育が課題となってくる可能性が高い。子どもへのメディアリテラシー教育が大事だということは少しずつ常識化しているし学校でもある程度取り組まれているが、スマホやタブレット端末を念頭においたものではないだろう。同じことは幼児にも必要で大事であろうが、幼児のメディアリテラシー教育を小学生や中学生と同じような形で行うことは現在では難しい。子育て支援の一環として、保護者へのメディアリテラシー教育の具体化を真剣に考えるべき時代が来ていると思える。

乳幼児の親子のメディア活用調査をふりかえって 小児医学、小児神経学の観点から

お茶の水女子大学大学院教授 榊原 洋一

① 小児科医の仕事

小児科医の仕事は大きく分けて2つあると思っています。1つは当たり前のことですが、子どもの病気を診断し治療することです。2つ目は、子どものよりよい成長と発達につながる環境について探索し、子育て中の親に情報を発信することです。

1つ目は主に、病院や診療所を通じて行われますが、2つ目の仕事の成果は多種多様な方法で行われます。保健センターでの健診や相談だけでなく、育児書の執筆や講演やマスコミ、そして最近ではインターネットを通じての情報発信が2つ目の仕事の例です。さらには、純粋な研究として、子どもの成長発達にとってよりよい環境は何かを探求する学術研究も2つ目のカテゴリーに含まれるでしょう。

そうした前提に立つと、小児科医として本調査結果をどのように考えればいいのか。

② 本調査で明らかになったこと

詳細は調査結果そのものを読んでいただきたいと思いますが、本調査で明らかになったもっとも重要な事実は、すでに乳幼児期から子どもが、従来のメディアの代表であったテレビだけでなく、大人のなかにこの数年の間に急速に浸透してきたスマートフォンと密接な関係を作り上げつつあるということです。2～3歳児の30%が少なくとも週に1日～2日はスマートフォンをみたり使ったりしているのです。しかしこれに驚くべきではない

かもしれません。調査対象の親の6割がスマートフォンを所持し使っています。スマートフォンは、従来型のテレビのように家どこかにおいて使用するものではなく、親が常に「身につけている」ものであり、親といつも一緒にいる子どもたちの関心の対象になるのは必然のことです。つまりテレビなどと同じく、スマートフォンは今や日本の乳幼児の当たり前の成育環境の一部として定着しているのです。

乳幼児期の子どもの行動の原型は、私は3つあると思っています。1つは親のそばにいたいという気持ち、つまり愛着行動です。2つ目は、まわりにいる人の行動をまねる模倣行動です。そして3つ目は、新奇なものや初めてみる物や人への好奇心になります。よく考えてみると、スマートフォンはこの3つの行動原型の行動動機を刺激する要素をすべてもっているのです。

いつもそばにいたい親が、子どもにとって未知のものを使っているのです。どんな子どもでも触ってみたいくなります。乳幼児は情報を追求する存在(インフォメーション・シーカー)であると、私の恩師である小林登先生はいつもおっしゃっています。スマートフォンは、ガラガラなどの従来のおもちゃ以上に、質的にも量的にも豊富な情報を発信しています。子どもがスマートフォンに惹かれるのは必然のなりゆきです。

③ 調査結果をどう読み、対応するか

さて問題はここからです。本調査で明らかになった乳幼児とスマートフォンの密接な関

係をみて、私たち小児科医はどうすればいいのでしょうか。

はっきりしていることは、乳幼児の生活空間に、これほどまでに双方向性のあるモノがあるのは、人類の歴史で初めてのことであるということです。新しい環境に適応する能力が高いことは、私たち人類がほかの動物に比べて格段の発展を遂げてきた理由ですので、スマートフォンのような環境に対しても、適応していくと想像できます。しかし、想像する以上のことが何かわかっているのかといえさそうではないのです。まだ未知の領域なのです。

小児科医のなかには、スマートフォンが子どもの発達に及ぼす「悪い影響」を予想して、その使用を控えることを主張する人たちが出てきています。しかし、そこに何らかの根拠があるかという点、そうでもなさそうです。

今回の調査のなかで私にとって印象的だった結果は、メディア利用のメリット、デメリットに関する親の意見です。上記の小児科医たちが、スマートフォンなどのメディア利用のうえで懸念することは、それによって親子の相互作用が減ってしまうのではないかとこの予想に立脚しています。今回調査対象の親の50～60%が同様に感じていることが結果に示されていますが、これは多くの親が無思慮に子どもをメディアにさらしているのではないことの証拠です。さらに私が驚いたことは、15～25%の親は、メディアのメリットとして「親子のコミュニケーションが増す」ことをあげていることです。こうした視点は、子どもをメディアから遠ざけることを主張する人にはみられません。絵本が親子の双方向のコミュニケーションの手段になりうることは、読み聞かせ運動などの隆盛からも明らかです。現代の若い親は、幼少時からさまざまなメディアと一緒に育ってきました。昔の親が、本や漫画で育ったのと同じく、ゲーム機でゲームをしながら育った親は、スマートフォンなどのメディアを、昔の親の絵本のように感じているのかもしれません。現代の若

い親は、メディアの悪影響だけでなく、よい影響の可能性もみているのです。

では専門家である小児科医と親では、どちらの判断のほうが、より正確なのでしょう。既知のことについては、判断ができますが、すでに述べたように未知のことについては、どちらが正しいとは言い切れないのではないのでしょうか。

④ 私たちは何をすべきか

これまで述べてきたことから引き出される結論は、1つしかありません。それは人類の歴史で初めて経験するメディアにかかわる子どもの生育環境の変化が、子どもの発達成長に及ぼす影響(よい影響、悪い影響両者とも)を注意深くみていくことです。

小児科医の役割は、その専門的知識を動員して、その任にあたることであると思います。

乳幼児の親子のメディア活用調査をふりかえって

子どもの発達と親子のかかわりの観点から

お茶の水女子大学大学院教授 菅原 ますみ

① 子どもの認知発達からみた新しいメディアの登場

今回の調査結果から、この1～2年で乳幼児をもつ家庭にスマートフォンやタブレット端末などの新しいメディアが急速に浸透しつつあり、幼い子どもたちとの接触が予想以上の広がりで見始めていることにあらためて驚きました。第1章第2節にあるように、スマホを「ごくたまに」以上の頻度で、つまり少なくとも接触経験はある、という子どもの割合は0歳後半でも1割以上であり、1歳で36.3%、2歳で47.6%と半数に迫っています。母親がスマホを所有している2歳児では、子ども自身も「ほとんど毎日」使っている割合が22.1%であり、約4人に1人の割合にのぼっています。

メディアに限らず、ツールは人間の感覚や運動の延長で生まれてきました。スマホやタブレット端末はテレビやビデオ・DVDよりもずっと軽くて小さく、幼い子どもたちの手にも収めることが可能です。この身体密着度の高さによって、子どもにとってこれらのメディアはおもちゃと同じように自分の意のままになるからだの一部のように感じられ、これまでのどのメディアとも異なる親しい存在としてのつきあいが始まっていると考えられます。また、乳幼児は自分が外界に働きかけた結果がフィードバックされることに大きく興味を惹かれます。一方向的なテレビ番組やビデオ・DVDソフトとは異なり、画面に触れる指先の運動と驚異的な情報量のコンテンツ世界との相互作用がするする展開するタッチパネル・メディアは、コンテンツとつき添

う大人のガイドによっては、0歳後半の乳児であっても集中してその内容を学習することが可能になると予想されます。

スマホやタブレット端末は認知的な学習のツールとして大きな可能性を秘めたものであり、その有効な利用方法についてさまざまな研究が展開していくことと思います。一方で、こうした子どもとの距離の近さや相互作用の流暢さ、コンテンツのおもしろさのゆえに、青少年や成人ですでに問題となっているような長時間使用の弊害や過度の依存・中毒状態の出現といったネガティブな影響性も危惧されます。人生の最初期からスマホやタブレット端末と一緒に過ごすことが子どもたちの発達にどのような影響を及ぼすのか、メリットを大きくしデメリットを防ぐにはどうしたらよいか検討していくことは、今後の大きな研究課題でしょう。

② メディアデバイスやコンテンツの作り手に向けて

子どもと同様に、スマホはその身体密着度の高さゆえに、すでに多くの親たちにとって手放すことのできない“身体化”した存在となっています。テレビやビデオ・DVDのようにスイッチのオン/オフによって接触の有無をコントロールできる媒体であれば、その使い方のルールや影響性を吟味しながら子どもに触れさせることができますが、スマホは常時親自身とつながっており、その密接な関係性のなかに子どもが登場することになります。第1章第8節で示されているように、どの年齢層の子どももスマホが社会に浸透し

たこの1～2年の間に同じような割合でスマホ・デビューを果たしており（母親がスマホを使用している家庭では、1歳児は0歳時点で、2歳児は1歳時点で、3歳児は2歳時点で、4歳児は3歳時点で、5歳児は4歳時点で、6歳児も5歳時点で、それぞれ3割以上の子どもたちがスマホを使い始めている：表1-8-3参照）、本文で考察されているように、“親子で同時に使い始めている”様相が浮き彫りになっています。

どうやって子どもに触れさせるべきかという親の“吟味”が追いつかないまま子どもの新しいメディア使用が始まっていることは、第2章第1節で、子どもが使用するオンライン系のメディアにフィルタリングをかけている割合は2.5%（据え置き型ゲーム機）～6.6%（タブレット端末）と非常に低い割合に留まっていることにも現れています。また第3章第5節でも「家族で、子どもが見たり使ったりする内容が年齢に適切か、話し合っている」家庭は「あてはまる」が14.8%、「ややあてはまる」が33.5%で5割に達していません。こうした状況を踏まえて、ユーザー教育の必要性とともに、メディアデバイスやコンテンツの制作者の方々には、子どもを守るブロックをソフトや機器、システム側に早急に設定する必要があること、また新しいメディアのもつよさを生かしながら子どもの学びに役立つ年齢にふさわしいコンテンツを開発していくことが必要であることを理解していただきたいと強く感じました。

③ 今後の乳幼児の親子とメディア

子どもの健やかな育ちには豊かな対人的・対物的な環境刺激が必要です。友だちや親とおしゃべりしたり楽しく遊ぶ、野外で自然に触れる、からだをたくさん動かす、おもちゃや絵本、お絵かきに落ち着いて取り組むといった多様な活動をバランスよく日々の生活のなかで体験する——今回の調査でも、新しいメディアとの出会いがありつつも全体とし

ては子どもたちに多様な活動の時間が確保されていることがわかりました（第1章第3節）。多くの保護者の方々がこうした体験の重要性を認識し、健やかな子どもの生活を維持しようと努力されている結果だと思えます。メディアとのつきあい方についても、テレビやビデオ・DVD、ゲーム機についてはルールを決めて守らせようとしているご家庭がほとんどでした。しかしスマホや携帯電話では、ルールを決めていないというご家庭も低年齢層では比較的多く存在し、子どもにとってよりよい使用方法について模索されている段階にあると考えられます。

多くの保護者の方が感じられているように、これからの社会ではより一層メディアを使用する生活の範囲も利用の頻度・深さも拡大し、多様なメディアをじょうずに使いこなせる子ども、そしておとなに成長していくことが必要とされます。スマホやタブレット端末は親にとっても未知の部分がたくさんあると思いますが、親子一緒にゆっくり楽しみながら、ともによいユーザーに育っていくことがのぞましいと感じます。ときには吸収力の高い子どもたちのほうが先に上達することもあるでしょう。ママにもその使い方、教えてね——そんな会話を楽しみながら親子の時間を過ごしていただきたいと思えます。